

モニタリングサイト1000 陸生鳥類調査 情報

2017年 2月号 Vol. 8 No. 2



Pericrocotus divaricatus
Photo by Toshifumi Miki

結果速報

モニタリングサイト1000 2016年度繁殖期 一般サイト結果速報 森本 元（日本野鳥の会）

全国約1,000ヶ所のモニタリングサイトのうち、森林・草原の一般サイトは約420ヶ所を占める重要な分野です。調査には、多くの市民調査員のみなさまにご協力いただいております。森林・草原の一般サイトでは、概ね5年に1度、陸生鳥類調査（繁殖期および越冬期）および植生概況調査（繁殖期のみを実施）を行っています。2016年度の繁殖期は、調査を96サイト（森林77サイト・草原19サイト）にお願いしました。そのうち、依頼した中から調査を実施できなかったサイトなどを除き、現時点でデータが集まり集計が完了している森林66サイト、草原18サイトの計84サイトのデータを用いて、中間報告いたします。

記録された鳥類(2016年度)

合計164種（森林129種・草原111種）の鳥類が確認されました。この種数はサイト数が同じ去年や一昨年と比べても10～20種多く、かなり大きい値と言えます（表1）。調査サイト数が少なく、かつ、サイト間の環境の違いが激しいため出現種数や種構成が安定しない草原サイトを除き、森林サイトについてのみを比較しても、昨年と今年ではほぼ同じ調査地点数を調査していますが、出現種数は、昨年の116種に対して129種でした。つまり、調査地点数が同数でも、確認種数のみが増加しています。

5年で1期であるモニタリングサイト1000調査では、5年かけて全ての調査地を調べているので、毎年異なるサイトを調査しています。しかし、確認される種数は、毎年ずっと同じように安定していました。では今年の種数増加は、あくまで誤差変動の範囲なのか、それとも大きな変化なのでしょう。これについては、後ほど詳しく考えてみたいと思います。

表 1. 繁殖期における出現種数の推移

年度	サイト数	種数
2016	84	164
2015	84	143
2014	84	155
2013	77	132
2012	79	138

出現率と優先度

次に、森林における出現率、優占度の上位種を表2・3に示しました（出現率：ある種の出現サイト数÷調査サイト数、

表 2. 2016年度繁殖期の出現率の上位10種

a) 森林 (n = 66)			b) 草原 (n = 18)		
順位	種名	出現率	順位	種名	出現率
1	ハシブトガラス	90.9	1	ハシブトガラス	94.5
2	ウグイス	89.4	2	キジバト	88.9
3	コゲラ	86.4	3	ウグイス	83.3
3	ヒヨドリ	86.4	3	カワラヒワ	83.3
5	キジバト	84.8	3	ハシボソガラス	83.3
5	キビタキ	84.8	6	ツバメ	72.2
7	シジュウカラ	84.8	7	アオサギ	66.7
8	ヤマガラ	68.2	7	カッコウ	66.7
9	アオバト	63.6	7	ヒバリ	66.7
9	メジロ	63.6	7	ヒヨドリ	66.7
			7	ホオジロ	66.7

表 3. 2016年度繁殖期の優占度の上位10種

a) 森林 (n = 66)			b) 草原 (n = 18)		
順位	種名	優占度	順位	種名	優占度
1	ヒヨドリ	11.9	1	ムクドリ	6.7
2	ウグイス	6.7	2	オオヨシキリ	6.5
3	ハシブトガラス	5.7	3	ウグイス	6.1
4	シジュウカラ	5.5	4	セッカ	6.0
5	キビタキ	4.7	5	ヒバリ	4.7
6	メジロ	4.2	5	ホオアカ	4.7
7	ヤマガラ	3.6	7	コヨシキリ	4.4
8	コゲラ	3.2	8	ホオジロ	3.7
9	キジバト	3.1	9	ハシブトガラス	3.3
10	ヒガラ	3	10	ツバメ	3.2

優占度：サイトでのある種の個体数÷総個体数を平均したもの。さて、今年の上位種の種構成を、第2期5年間全体（2008-2012年度）と5年前の上位種構成の結果と比べて、検討してみましょう。モニタリングサイト1000の調査は、前述のように5年を1期として行っていますので、5年前の調査サイトは今回の調査サイトとかなりの数（半分以上）が同じ箇所です。ほぼ同じ場所での経年変化を知ることができる比較対象として高い価値があります。過去のニュースレターにて詳しく触れていますが、これまでの調査成果では、ある年の結果と5年前の結果は、上位種の構成や順位がとても似ています。トップ10の下位グループに入ることが出来る種の順位は年変動し、10位前後を行ったり来たりしますが、最上位種のメンバーはほぼ同じなのです。第2期の出現率上位10種は、ウグイス、キジバト、キビタキ、コゲラ、シジュウカラ、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ホトトギス、メジロ、ヤマガラ（五十音順）でした。さらに過去の上位種の順位変動を図1に示しました。この図から、これまでの最上位各種の順位の安定性がよく分かります。

しかしながら、今年の上位種はかなり様子が異なります。今年ハシブトガラスが1位、ウグイスが2位に

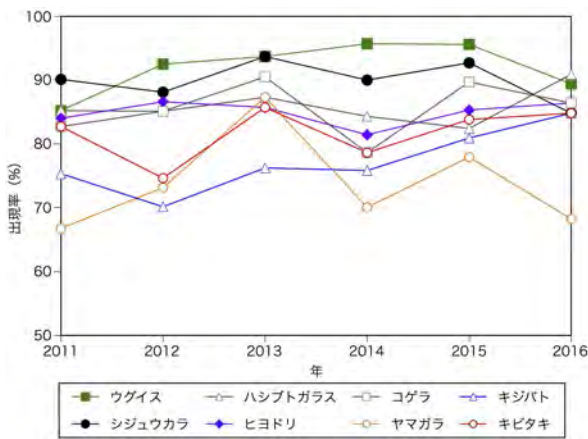


図 1. 過去6年間の森林サイトにおける優占度上位種

なっています。さらに、不動の最上位種の一つであるシジュウカラが5位に後退しています。5年前の2011年の調査では、1位がシジュウカラ、2位がウグイス、3位がハシブトガラス、4位がヒヨドリ、5位がキビタキでした。これは第2期や、昨年までの毎年の上位と似た結果です。これらより、今年の上位種の様子が、過去とかなり異なることが見て取れます。これについて、さらに詳しく考えてみましょう。

過去の上位種の順位変動を示した図1を見ていただくと、ほとんどの年で1位はウグイス、2位はシジュウカラ、ハシブトガラスかコゲラが3位であることがわかります。しかし、今年ではウグイス、シジュウカラという最上位2種が順位を落とし、入れ替わるように、例年3～5位だったハシブトガラスがトップに出た形です。この結果だけを見ると、前者の種が減少して、後者の鳥が増えているように思う読者もいらっしゃるかもしれません。しかし、そうではないようです。図1から分かるように、過去毎年1位だったウグイスの出現率は、ほとんどの年で90%を超えています。つまり、ほぼ全ての森林サイトにおいてウグイスが確認されている、ウグイスが見られなかったサイトはほぼ無かったのです。これはずっと2位だったシジュウカラも同様です。しかし、これらウグイス・シジュウカラ2種の今年の出現率は、ともに90%未満に落ち込んでいます。他方、今年1位のハシブトガラスの出現率は約90%で、2位のウグイスが約89%、3位のコゲラは86%でした。ハシブトガラスはやや高いですが、いずれも過年度とほぼ同等です。つまり、ハシブトガラス初の出現率1位という今年の上位集団の順位の交代は、ウグイスとシジュウカラの出現率低下の影響が大きな原因だといえましょう。

他に目立った変化は、アオバトの躍進です。トップ集団の中位のキジバト、キビタキ、ヒヨドリ、ヤマガラの順位は例年並ですが、そこにアオバトという、過年度には見られない種が食い込んでいます。昨年のアオバトの順位は19位で出現率52.9%でした。つまり今年は約10%近く出現率が上昇しています。これはアオバトが増加したためなのでしょう。その可能性はゼロではありませんが、最上位種の入替わりと、今年の出現種数の増加という複数の変化が同時に起こっている点を考慮すると、調査サイトが毎年入れ替わっていることの影響を否定はできません。モニタリングサイト1000の調査は、毎年、針葉樹林や広葉樹林、照葉樹林といった各森林環境を、バランスよく調査サイト選択して、調査が行なわれています。しかしながら、サイ

トの森林環境は場所によって様々です。あくまで例え話ですが、見た目が同じような森林を選んでいても、今年がたまたま、「山っぽい」森林が多めに選ばれていて、上位種の入替わりやアオバトの躍進を引き起こしているのかもしれない。そうしたことを明らかにするには、引き続き毎年の調査を積み重ね、振り返ってみて総合的に判断することが重要となります。図1を見ても分かるように、ある種の順位がある年に下がったからといってそれが続くとは限りません。各種の動向を判断する為には、数年にわたるモニタリングが不可欠なのです。今後はアオバトの動向にも着目したいと思います。

サイトの入替えて起こる種数と構成種の変化

北は北海道、南は沖縄県までカバーするモニタリングサイト1000において、毎年調査サイトを入れ替えると、当然ながら、出現する種構成や種数が変化してしまいます。しかしながら、不思議なもので、たくさんのサイトを調べると大体同じような順位や数値になります。このように上位種の順位が安定しているのは、様々な環境からバランスよく毎年サイトを選び出している調査設計の結果なのです。他方、順位が極端に低い種では、そうはいきません。今年、種数が増加した原因の一つは、サイト選択のバランスがあるかもしれません。これについて少し考えてみたいと思います。表4に、昨年確認されず今年確認された種のリストを示しました。いかがでしょうか、少し驚くような種が入っていることに気がつくのではないのでしょうか。ギンザンマシコなど局地的な繁殖分布をする種や、水鳥であるサギ類やコヨシキリといった草原性の種が含まれています。森林サイトであるにも関わらず、こうした草原や水辺の種が含まれている、しかも、昨年は出現していなかった…。これらの様々な点を総合的に考えると、どうも今年の調査サイト選択が種数増加に影響しているといえそうです。森林サイトの中には、ダムそばであったり、北海道や高山帯近くのような森林であっても草原的環境が含まれるサイトが存在しています。こうしたサイトの存在が、種数という観点での結果へ影響してしまっているのかもしれない。単年度ではこうした問題が生じますが、5年をまとめて比較を行えば、同じ場所同士で比較が可能になりますから、こうした影響は除くことができると思います。

表 4. 昨年確認されず、今年確認された種の一覧(森林草原サイト)

種名	種名	種名
アオバズク	キンクロハジロ	シロハラ
アリスイ	ギンザンマシコ	セッカ
イヌワシ	キンバト	チュウサギ
オオジュリン	クサシギ	ハギマシコ
オオヨシキリ	クロサギ	ハヤブサ
オジロワシ	ゴイサギ	ホシガラス
オナガ	コノハズク	ヤイロチョウ
カイツブリ	コムドリ	リュウキュウコノハズク
カヤクグリ	コヨシキリ	リュウキュウサンショウクイ
カンムリワシ	シマセンニュウ	

調査へのご協力ありがとうございました

今回の結果からも、モニタリングサイト1000が推進する長期調査を継続することの有用性の一端を感じていただけたものと思います。毎年の調査結果の積み重ねを前提とし

て、調査設計がなされ、長期的に調査を絶えず継続していくことが重要となることを御理解いただければ幸いです。日本の自然環境のモニタリングの実施には、大勢の人々のご協力による調査継続が欠かせません。引き続き、皆様のお力添えをよろしくお願いいたします。

2016年度繁殖期の一般サイト調査には、119名の皆様のご協力をいただきました。最後にお名前を記し、お礼に変えさせていただきます(敬称略, 順不同)。

飛鳥和弘, 阿部誠一, 荒 哲平, 石井 隆, 磯部 浩, 一戸 静夫, 井上幹男, 今井健二, 今里順一郎, 岩崎健二, 植田 潤, 江島浩紀, 太田達夫, 太田知子, 大吉信子, 荻原千恵美, 奥野俊博, 尾崎高博, 笈部達也, 小畑義之, 折田一実, 金谷道行, 上岡隆司, 川田裕美, 川内 博, 河藤昌子, 木本祥太, 工藤和彦, 工藤文江, 工藤芳郎, 小枝琢三, 後藤慎一, 小荷田行男, 小林繁樹, 小林宣広, 小堀英憲, 近藤健一郎, 齋藤 修, 齊藤 信, 酒井泰和, 酒井

義弘, 阪口昌通, 坂根勝美, 佐藤里恵, 佐野清貴, 重政慶三, 渋谷一明, 下土居知子, 住岡昭彦, 関川 實, 関 高史, 曾我茂樹, 多賀憲雄, 高畑 晃, 宝田延彦, 瀧川二士男, 竹田憲正, 田代省二, 館 憚二, 田中 忠, 田中利彦, 田中英昭, 田中葉子, 谷畑藤男, 田丸八郎, 田村耕作, 丹野弥生, 千葉博光, 辻村正勝, 寺田紋子, 東條秀徳, 土岐修平, 豊田陽一, 長江卓哉, 中尾禎志, 長田宏子, 中南秀樹, 中山和也, 新山英憲, 西村四郎, 野口真磨子, 野村 亮, 長谷部謙二, 長谷部 真, 浜崎 登, 浜谷武雄, 浜谷まり子, 葉山政治, 平井正志, 平野敏明, 廣田博厚, 藤井 薫, 船橋 功, 古田和生, 星 英男, 堀尾岳行, 前田和浩, 前田洋一, 松田久司, 松原真知子, 三浦 隆, 村山良子, 室瀬秋宏, 揉井千代子, 森山春樹, 築川堅治, 柳田和美, 柳田弘子, 柳町邦光, 山口雅生, 山田勝巳, 吉田和人, 吉田早容, 吉邨隆資, 頼 ウメ子, 渡辺裕幸, 奥津, 佐藤, 前田 ※名字のみ記載の方

活動紹介

モニタリングサイト1000 鳥類調査に参加して

栗栖卓志(岡山理科大学自然を学ぶ会 NSS)

今年度から、私たち岡山理科大学自然を学ぶ会 NSSはモニタリングサイト1000の陸生鳥類調査に参加させていただくことになりました。調査にあたり、お世話になった関係者の皆様のご協力、ご指導に感謝いたします。

岡山理科大学自然を学ぶ会 NSSでは岡山を中心に自然や生き物に関する活動や講演会、観察会への参加など幅広い活動を行っています。さらにそういった場で学んだことを活かしながら、環境教育、普及・啓発活動への参加、イベントの発案、企画から実行などにも多くの他団体や先生方の助けをいただきながらですが取り組んでいます。具体的にはアユモドキやダルマガエル、ブッポウソウなど希少生物の保全活動への参加や、日本野鳥の会岡山県支部の方々と開催することができた岡山でのYoung探鳥会などです。これを通して様々な立場、世代の方々と交流を深める中で多くの分野への知見を広げています。

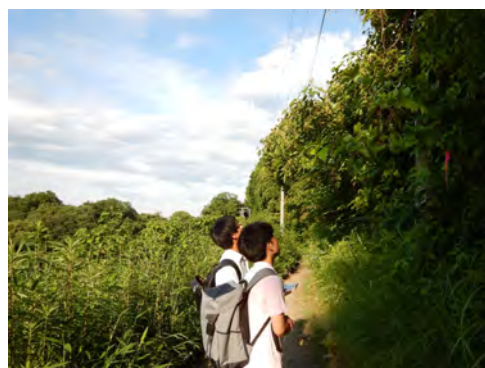


Young探鳥会の様子

私たちは昨年度、岡山で行なわれたモニタリングサイト1000の鳥類調査研修会に参加し、調査の意義やこれまでの調査でわかったことを知ることができました。実際にやってみてですが、これらの背景を理解し、知っておくことは調査に対するモチベーションの向上にもつながったと思います。研修会ではそのほかにも野外でのスポットセンサス法による鳥類調査や植生調査の実践など多くの事が学べました。

そして研修会後、実際に調査のお話をいただき、大学の裏手にある半田山での調査をすることになりました。調査地の半田山は岡山市街からそう離れていない小さな山ですが、開けた草原、鬱蒼とした森林などが広がり、野鳥をはじめ多くの生き物が生息しているため自然観察に私たちもよく利用するフィールドです。調査にあたっては、普段は道を歩きながら野鳥を探す方法で野鳥観察をすることが多いため、定点に留まって鳥をカウントするスポットセンサス法はうまく出来るか不安でしたが、初回の調査の際には調査員の方にサポートしていただいたうえ、前述の研修会における野外実践での経験もあり、支障なく進められました。また調査地では、ほとんど野鳥を視認することができないほど木々が茂って常に薄暗いようなポイントがいくつかありますが、しばらく同じ場所に居続けられるので鳴き声をじっくり聞くことができ、このような点でスポットセンサス法の優れたところを感じることもできました。

最後に、学生だからとっていい加減な調査が許されるわけではないので、これからも真剣に取り組むとともに、今後の調査の際により大きな力になれるよう必要な知識や技術、経験などを養いたいと思います。また、今回のような情報の蓄積が大切な活動を継続していくためにも、子供たちや学生を含めた多くの人たちに自然や生き物に対して関心を持ってもらう活動をしていきたいです。



半田山での調査

結果速報

2016年度 コア・準コアサイト鳥類調査 繁殖期結果報告

植田睦之(バードリサーチ)

2016年の繁殖期は、30サイトで調査を行ないました。これまでの記録種数をみると(表1)、多少の増減はあるものの、各サイトにおける毎年の種数は比較的安定していました。この傾向は年変動の大きい越冬期の結果と比べて顕著で、バイオマスについても同様の傾向があり、繁殖期の森林鳥類の生息状況の安定性が今年も確認できました。

コアサイトで起きているシカの影響

「安定している」といいましたが、コアサイト、準コアサイトでは大きな変化も起きています。それがシカによる藪を利用する鳥の減少です。これまでも各地の状況をご報告してきましたが、今年も新たな変化が記録されました。埼玉県秩父の大山沢でのウグイスの変化です。

表 1. 2009～2016年繁殖期コア/準コアサイトの確認種数

サイト名	種数							
	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
足寄	27	33	30	30	34	28	28	28
雨龍	33	27	36	32	29	25	29	31
苦小牧	26	28	24	25	29	24	23	29
カヌマ沢	20	21	24	19	22	24	23	23
大佐渡	25	32	27	31	27	32	25	28
小佐渡	30	33	28	27	32	29	29	31
小川	22	24	25	26	33	30	28	28
那須高原	30	36	32	32	28	31	27	32
大山沢	27	36	29	27	30	29	30	29
秩父	33	38	28	29	31	31	28	31
カヤの平	22	23	25	29	27	27	30	20
おたの申す平	19	20	14	17	22	23	20	17
愛知赤津	23	19	22	18	22	22	19	26
芦生	25	25	20	22	17	25	17	23
上賀茂	23	22	16	21	21	23	26	19
和歌山	24	19	19	23	21	20	20	
市ノ又	20	21	18	22	23	19	18	22
綾	22		24	23	25	25	18	20
田野	22		25	20	24	22	24	22
与那	16	17	16	17	17	16	20	16
奄美		19	18	16	17	16	18	17
大雪山					32			
野幌		31				31	23	27
大滝沢	23				24			
早池峰		22					25	
青葉山		26				24	24	25
金目川		35					31	
高原山	27				34			
筑波山	28				28			
西丹沢	24				32			
富士			30					
函南		27					27	
御岳濁河		22					23	
木曾赤沢	20				16			
三之公						24		
春日山			25					24
大山文珠越			23					31
半田山				15				21
臥龍山			23					
官島	21					23		
佐田山				16				
対馬龍良山				14				
粕屋			20					23
権葉		26				22		
屋久島スギ林				15				
屋久島照葉樹林		14						18
西表	15							14
小笠原石門			4					6

そして記録されなくなった…

大山沢はシオジの大木のある溪畔林です。林床はスズタケが覆っていましたが、シカの増加に伴い、スズタケは減ってしまいました。さらに2013年から2014年にはスズタケが開花し、全面的に枯れてしまいました。通常は数年で実生が育ち、回復するそうですが、実生をシカが食べてしまっているのか、今年はスズタケの茎のみが林立するような状況になってしまいました(図1)。

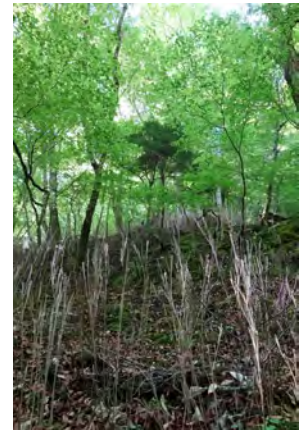


図 1. スズタケの茎だけになった大山沢の林床

おそらくその影響で、大山沢ではウグイスの記録数は年々減少傾向にあります。そして、今年、ついに調査地内でウグイスが記録されなくなりました(図2)。同様に藪を利用するコルリ、コマドリ、ソウシチョウも減少傾向にありますが、今年は記録できました。しかし、この「茎の林」も倒れて疎らになってきていますので、来年以降どうなるのか心配です。

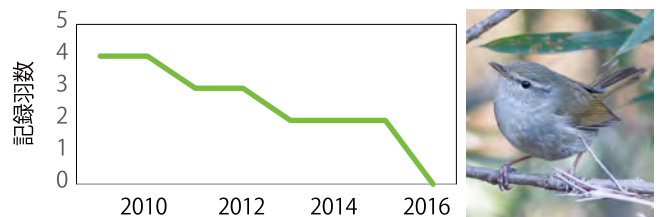


図 2. 大山沢のウグイスの記録数の変化(写真:高橋ゆう)



図 3. 設置されたシカ柵

この冬、大山沢ではシカ対策のシカ柵の工事が行なわれています(図3)。それほど高さのない網の柵ですが、冬の調査で見ている範囲では、シカを防ぐ効果はありそうです。その効果でウグイスなどの藪を利用する鳥は復活してくれるのでしょうか? これからもモニタリングを続けて、効果を見ていきたいと思えます。

調査へのご協力ありがとうございました

2016年の現地調査にあたっては、岩本富雄、植田睦之、上野あや、梶田 学、勝野史雄、川口大朗、川崎慎二、栗栖卓志、小山留美、今野 怜、佐々木務、佐々木朋子、佐野清貴、柴田憲一、外間 聡、高美喜男、高橋啓介、滝沢和彦、瀧本宏昭、知花重治、津山紗央莉、中村 豊、濱田哲暁、平野敏明、堀田昌伸、柳田和美、梁瀬桐子、山崎智子(敬称略)ほか多くの方々のご協力をいただきました。皆様に感謝いたします。

事務局からのお知らせ

全国鳥類繁殖分布調査

調査の状況と越冬分布調査

植田睦之(バードリサーチ)・荒 哲平(日本野鳥の会)

今年度からはじまった全国鳥類繁殖分布調査。前号のニュースレターでもご紹介しましたが、夏鳥が復活している可能性が見えてくるなど成果があがりつつあります。来る繁殖期も、サントリー世界愛鳥基金、自然保護助成基金の支援の下、さらに活発に活動を進めていきたいと思ひます。調査へのご参加、ご協力よろしくお願ひいたします。

調査の登録状況

繁殖分布調査では、決められた3kmのコースで現地調査を行ないます。これまでに約半分のコースの担当者が決まりました。しかし地域によってはほとんど調査者の決まっていない場所もあります(図1)。また調査者が決まっている地域でも、現地調査だけではその地域の繁殖鳥類を完全に把握することはできません。アンケート調査でそうした「漏れ」を補っていかうと思ひますのでぜひ情報をお寄せください。

参加の方法

アンケート調査は以下のWEBサイトあるいは「いきものログ」の特設サイトから情報を送るだけです。ただし、「いきものログ」を使う場合は事前の登録が必要です。

WEBサイト <http://www.bird-atlas.jp/bbaq.html>

いきものログ <http://bird-atlas.biodic.go.jp/>

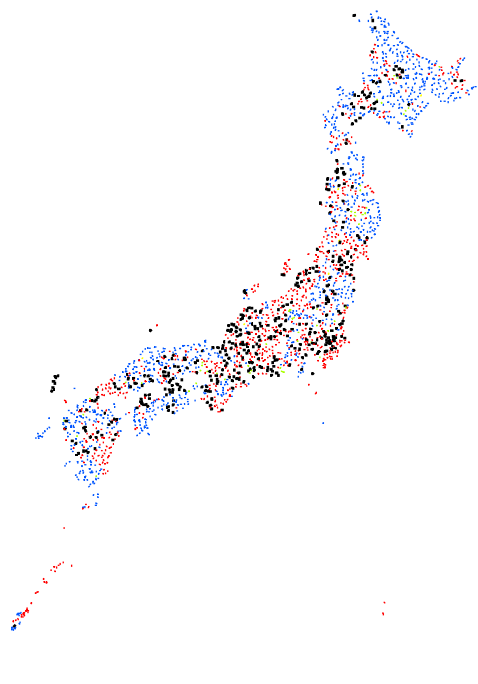


図1. 現在の繁殖分布調査の登録の状況。黒が2016年に調査が終わったコース。赤が調査責任者が決まっているコース。緑が調査協力者はいるが責任者が決まっていないコース。青はまだ調査者がいないコース

現地調査はまず調査者登録をしてください。

<https://db3.bird-research.jp/~birdatlas/volunteer.html>

登録されると、調査地の地図が送られてきます。その地図の中から調査可能な調査地を選んでください。

越冬分布も調べます

「繁殖調査もまだまだなのに…」と思われるかもしれませんが、ちょっと欲張って、越冬分布も調べたいなど、思ひ始めました。

先日カシラダカが国際レッドリストで絶滅が危惧されるようになったように、冬鳥でも減っている種がいるからです。また、一般サイトの結果からミソサザイの越冬分布が広がっていることが見えてきており(図2)、温暖化の影響もありそうです。この際、情報蓄積をして過去の調査と比較することができたら、さらに多くの種の状況が見えてくるのではないのでしょうか？

第3回自然環境保全基礎調査(1988年) 第2期越冬期(2008-2012年)



図2. 1980年代と2000年代の越冬期のミソサザイの分布の変化。1980年代には記録されなかつた北海道中部から東部にかけてのエリアで越冬期の分布が確認されるようになった

アンケートによる情報収集

冬鳥の様子は年によって大きく変わります。今年は東京の低地の林でアトリが観察されますが、例年は観察されません。また、カラ類の混群のように、群れになっているものも多く、なわばりをもって満遍なく分布している繁殖期と違って、数回の調査でその数を明らかにすることは困難です。

そこで、繁殖期の調査のようにセンサスはせずに、皆さんの普段の観察の情報をアンケート形式で収集する方法を取りたいと思ひます。

対象種は留鳥、漂鳥、冬鳥などすべての種。情報送信の方法は2つ、Excelファイルで送っていただく方法と、WEBフォームから送る方法です。

ぜひ、越冬分布を明らかにする調査にもご参加ください。

WEB: <http://www.bird-atlas.jp/wba.html>

Excel: <http://www.bird-atlas.jp/data/wba.xls>

全国鳥類繁殖分布調査事務局

183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9 バードリサーチ内
bbs@bird-research.jp 担当: 植田睦之

事務局からのお知らせ

モニタリングサイト1000 研修・交流会の報告

荒 哲平(日本野鳥の会)

モニタリングサイト1000の事業は多くの市民調査員のみなさまのご協力によって運営されています。今年の4月から、第3期の最終年となる5年目の調査がスタートします。このような大規模かつ長期的な事業を継続するには、調査員の確保とモチベーションの維持は欠かせないものです。陸生鳥類調査ではこれまで、モニタリングサイト1000の事業紹介と調査方法の共有のための研修会を全国各地で行なって来ました。2013年からは調査手法の講習のウェイトを落として、各地域で様々な調査・モニタリングをされている方の交流・情報交換の場となることを目的として、研修会を実施しています。

2016年は北海道、秋田県、東京都の3か所で研修会を実施しました。北海道は、濤沸湖水鳥・湿地センターを会場とし、座学の後には東京農業大学オホーツクキャンパスの学生の方達にも日頃の活動・研究紹介をしてもらいました。学部2年の松田実希さんには、野鳥研究会の活動を紹介いただきました。海ワシ類やハクチョウ類などのカウント調査を独自に進め、他大学のサークルとも積極的に交流さ

れているそうです。長門石涼平さんには、卒論研究の中間報告を直前に控え、網走地域に生息するエゾフクロウの興味深い食性について語っていただきました。同じく卒論生の工藤茜さんには、シギ・チドリ類を愛するに至った経緯と、その採餌方法の特徴について動画を交えながら説明いただきました。秋田県では、日本野鳥の会秋田県支部長の佐藤公正さんに、希少種も多く記録される県内の鳥類目録についてご講演いただきました。また、秋田県立大学から学生さんの参加もあり、参加者同士の新しい交流が生まれました。東京会場では、毎年データ解析などの講習も行なっています。今回は、ICレコーダーを用いて録音した野鳥の声を、無料ソフトを用いて音声解析しました。パソコンの操作に慣れていない方でも、最終的には声紋(ソナグラム)を抽出することができました。

モニタリングサイト1000の研修会をきっかけに、調査が未経験でもベテランの方の調査に同行してスキルを磨き、新たな調査員として活躍されている方もおられます。来年度以降も、調査活動そのものに関心を持っていただける方の活動がより活発になるような研修会の実施を計画しておりますので、詳細が決まり次第このニュースレターでご案内します。初心者の方の受講も歓迎いたします。みなさまとお会いできる日を楽しみにしております。



写真 1. 秋田の鳥の状況について発表する佐藤公正支部長



写真 2. 東京農業大学オホーツクキャンパスでの調査実習

Facebookページ運用中

調査状況の情報交換を Facebookページでしています。Facebookのアカウントをお持ちの方はぜひご登録して、調査の様子をお知らせください。

<https://www.facebook.com/groups/548649768498672/>